



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

「真の日本の歴史」を学びたい!

―「国民文化講座」(6/26)、池間哲郎先生のご講演―

飯島隆史

かつて本会主催の「合宿教室」で、福岡県立高校にお勤めの占部賢志先生(現在、中村学園大学客員教授)は「戦後の歴史教育は直接に嘘を教へてゐたわけではないが、大事なことが抜けてゐて結局は嘘を教へたことと同じになつてゐる」旨を述べられた。昭和二十五年生れの占部先生は御自身が受けて来た教育を振り返りつつ語られたのだが、昭和二十八年生れの私も顧みて、戦後育ちの我々は「真の日本の歴史」を教はつてゐなかつたとの感を年々強くしてゐる。

本紙の先月及び先々月号でご案内の「国民文化講座」(六月二十六日開催)で、「講演いたたく池間哲郎先生も昭和二十九年のお生れで、私と同世代である。考へてみれば、八十歳代半ばまでのすべての人々は「戦後の歴史教育」を受けてゐることになる。そこでは所謂「東

京裁判史観」と「新憲法」とに則つた見方や考へ方が正しいものとされてゐた。さうした過去を二顧だにしない戦後の価値観は今も教育界や大手のメディアに根強く蔓延つてゐる。沖縄県にお生れの池間先生は、報道カメラマンとしてアジアの各地を巡られたご体験の視点から「戦後の歴史教育」に疑問を投げかけられてゐる。

ここでは、ご著書(「日本人だけが知らない世界の真実」など)に拠りながら、先生の歴史観、皇室観の一端をご紹介したい。

明治は「白人」との

孤独な戦ひの時代だった

明治維新からの時代は十九世紀後半から二十世紀前半にかけての世界の歴史から眺めねばならない。何故ならば、大東亜戦争以前の世界は帝国主義、則ち白人による植民地主義の時代であつ

たからである。世界で有色人種の独立国は日本だけであつた(「タイ王国」も独立を保つてはゐたが、それは英領ビルマと仏領インドシナとの緩衝地帯としての独立であつた)。確かに「明治時代は栄光の時代」と言へるが、同時に有色人種ではただ一つの独立国として辛く厳しい孤独な時代でもあつた。その証拠に、関税自主権を確立したのは、明治が終る前年の明治四十四年(一九二)である。明治といふ時代は「不平等条約撤廃」に向けた孤独な戦ひの時代であつた。

その後、第一次世界大戦終結の 파리講和会議(一九一九年)で日本は「人種差別撤廃条項」を主張して、米国のウイルソン大統領等に潰されたが、この主張はある意味では「植民地主義」の終焉を宣言したに等しいものであつた。遡れば、この植民地主義は「四九四年のトルデシリヤス条約(スペインとポルトガルで世界の領土を二分するといふ条約)に辿り着く。この条約は、「白人」の「カソリック教徒」のみが人類であるといふ考へ方に基づくものであつた。十五、六世紀のヨーロッパ人が新航路を開いて新大陸を開拓した時代を「大航海時代」と言ふが、ピサロがインカ帝国を滅ぼしたやうにマゼランやコロンブスも「大侵略時代」を生き

たと言つていい。かうした現実が二十世紀前半まで続く。大東亜戦争の遠因はこの「人種差別」にあつたとも言へる。

火災瓶事件で一変した皇室観

昭和五十年七月、皇太子同妃両殿下(今の上皇と皇后両陛下)が沖縄海洋博覧会の開催に合せて沖縄県に行啓された。その際に、「ひめゆりの塔」に献花されたが、その折、過激派の活動家が火災瓶を投げ付けるといふ事件が起きた。この時、両殿下はご説明役でお側にゐた元「ひめゆり部隊」の女性のことを終始気遣つてゐられたが、行啓のご日程は事件後も粛々と進められた。私は当時二十一歳だったが、この事件には非常なショックを受けた。両殿下のお気遣ひを知つたことで、それまでの皇室への思ひが一変した。その後、平成の時代になつて、両陛下のサイパン、パラオ(ペリリュー島)、その他東南アジア諸国への行幸啓を拝して、尊崇の念はさらに確固たるものとなつた。

先生はアジア各国で活動する中で、折々に「戦後の日本」への疑問を覚えられたといふ。さうした貴重なご体験が、「六月二十六日」には語られることと思はれる。多くの皆さんのご来聴を念じてやまない。

○ (本会事務局長)